

若者の文章能力

—— 看護学校学生の文章能力と国語教育 ——

梅原 恭 則

初めに

平成八年の秋筆者は、国立東長野病院附属看護学校の一年生48名と共に、幸田文の『祝詞』を読む機会があつた。読了後、文章能力を知る事も兼ねて感想文を提出させた。400字詰め原稿用紙を用ゐる事とし、提出期限は1週間後であつた。

ところが、そこには予想を上回る文章表現上の問題点が見出された。若者の文章能力に対する筆者の予測は、大幅な修正を余儀なくされたのである。それは根本的には個人に帰せらるべき問題であるが、同じ現象が共通して認められる事から見て、彼等が受けて来た作文指導乃至は国語教育にも原因がある事は明らかである。

そこで、この稿では、本人達の下承を得た上で看護学校学生の感想文を検討し、それに基づいて作文指導や国語教育の問題点を考へてみる事にする。

1 原稿用紙の記載法

看護学校生の感想文には、原稿用紙の記載法に既に幾つかの問題点がある。一つは、マス目の理解が十分でない事である。先づ、句点や読点に一マス使はないで、文字と一緒に区点・読点を書き込んでゐる例が多い(48名中13名)。行末で文が終る場合はそれも許されなくはないが、学生達の感想文では行末でない箇所それが現れるのである。

文中に空白のマス目が現れる事も少くない(5名)。

私は こんな親不孝は 絶対にしたくないと改めて 思いました。

結婚式の写真では 寄り添っていなかった二人が、

大勢の前で 意見を言ってまとめてしまったことに～

結婚生活の難しさや 教訓などを教えられた気がしました。

最初の例にはさう成つた理由が考へられなくもないが、他の例はそれも不可能で、その点これが最も初歩的な事柄であるだけに見過しに出来ない。

引用の仕方にも乱れが目立つ。一つは、引用文の記載法である。普通は改行して二字(一字)下げで記載するか、「」で引用部を明示するかするのが普通なのだが、さうしないで、自分の文章と識別出来ない形で記載してゐる者が3割近くゐる。また、引用部を原文通りに記載せず、自分の言葉を混入させてゐる者も少くない。最近の日本人には、他人の意見を自分の考へと思ひ込んでしまふ傾向があるといふ声も耳にするが、後者にはさうした傾向との関連も危惧される。

もう一つ、作品名を「 」を付けずに記載してある者が半数近くゐて、これも気に成るが、これは固有名詞と普通名詞との区別の問題なのかも知れない。

以上、要するに、原稿用紙の記載法についての指導が行き届いてゐない、といふ事である。国語教育で、もつと基本に立ち戻つて、このやうな事から身に付けさせる必要がある。

実際の生活では原稿用紙を使つて書く事等ないに等しいし、最近では電子機器の普及で、文書を手書きする事自体減つて来てゐる。しかし、自筆で文書を作成する必要性は、今後も決してなく成りはしない。また、原稿用紙の記載法は、単に原稿用紙に書く為の方法と言ふだけでなく、マス目のない普通の用紙に書く際の方法でもある。と言ふより寧ろ、国語教育に於ける原稿用紙記載法の指導は、普通の用紙に記載する方法を原稿用紙での記載法を通して学ばせる物なのである。この事は指導書等でも見過されてゐるやうだが、視覚的に混濁のない分明的な文章を書く為の第一歩は、原稿用紙記載法に基づいた書き方をする事なのである。

2 句読点

句読点の打ち方にも、問題点は少くない。中でも読点に関しては、大半に乱れがある。無論、読点の打ち方に厳格な規則がある訳ではないし個人差もあり得るが、それにしても彼等の打ち方は余りに混乱してゐる。文節毎に読点を打つ者がをり、一方で3~4行も続く文に殆ど打たない者があると言ふのでは、個人の好みと言つて済ませる事は出来ない。

また、打つべき箇所に打たないで、打つべきでない所に読点を打つてゐる例も少くない(約30例)。

久夫や、両親がとてもかわいそうでした。

～時、少しでも気持ちが和らぐ、言葉をかけて、

～を見て過ごせるのではないか、と思うといいなあと感じる。

甲斐子の思っていることは決して、間違っていないと思った。

大切であることはわかるがそれ以上に、大切なものもないので、大事にしたい。

それは、ごく少数ではあるけれども、区点の方にも及んでゐる。区点でも、

久夫と甲斐子の笑顔が頭の中に浮かんできたあの苦労はすごく大変なものだったが、

そして安心したもうこの夫婦は大丈夫だなと思ったのである。

のやうな、打つべき所に打つてゐない例があつたり(4名で5例)、

私は、甲斐子はすてきだな。と、思うと同時に、久夫は～を愛しているな。と感じた。

本能みたいな支配があつた。ようだが、そういう想いは、～

のやうな、打つてはいけない箇所に打つた例があつたりするのである(3名で3例)。

これは、憂ふべき事態である。区点は文の認識と直結し、読点は文の組立てと結び付くから、文法教育の問題でもあるけれども、句読点の指導が不足してゐる事は明らかである。

読点について結論だけ言へば、読点は、文の組立て方に従つて、それを視覚的にも明白にすべく、大きな意味の切れ目から優先的に打つ、といふ原則に従ふべきだと考へられる。時間的制約もあるから国語教育の場で総てを習得させる事は困難だとしても、大きな意味の切れ目から打つといふ位の事は徹底して身に付けさせたい物である。

3 漢字・文字表記

漢字については、若者の能力低下を予測してゐた所為か、それ程酷いといふ印象は受けなかつた。しかし、誤字は当然少くないので、ここでは目立つ例だけ挙げて置く事にする。

章説、印像、貴重面、場囿（面）、批格的、分拆、感念、婦夫、耐体力、不詳事、異外だ、多いに、その影には、嫌悪な雰囲気、私の結婚感、感心を持つ、自分自信、話の内容事態、何齡になつても、見の置き場、

中には、空覚への文字を苦心惨憺して書かうとした結果か、現実にはあり得ない漢字を作り出してゐる例もあつた（3例）。

より顕著なのは、漢字表記すべき語句を仮名表記する傾向である。中には殆ど仮名だけで書かれた文章もある。正に漢字教育の現状を垣間見る思ひがするが、翻つて考へてみると、既に大人の世界で起つてゐる現象がより顕著に現れただけなのかも知れない。戦後始つた、漢字制限或いは平易な文字表記の推進といふ国語政策の結果が、このやうな形で大人にも子供にも現れてゐるのである。

その点では、もう一歩進んだ、「なんだか古くてカタい話だ」「口ゲンカをする」「エンギが悪い」のやうな片仮名表記（4例）も、現れるべくして現れた物とも言へる。「カタい」には何等かのニュアンスを付加しようとする意識が働いてゐるやうでもあるが、それはともかく、片仮名表記には劇画や漫画等からの影響も考へられなくてはならないから、この種の表記は今後も増えて行く事に成るのかも知れない。

しかし、文字表記に於ける最も緊急の課題は、算用数字の乱用の問題であらう。今回の感想文では縦書きが26名、横書きが22名であつたが、横書きは勿論、縦書きの文章に迂算用数字が頻出するのである。縦書きの26名中、算用数字を全く使はなかつたのは3名だけである。さうして、既に縦書きの文章に、「1言で言うと」「久夫と甲斐子の2人は」「1番おもしろかった」等のやうな例が出現してゐる（13例）。漢字表記が当然な語句迄、算用数字で表記するやうに成つて来てゐるのである。

横書き文書が一般的に成つて、算用数字の使用も益々多く成りつつあるが、それに伴つて漢数字と算用数字の書き分けといふ新たな問題が生じた。数量は数字で表記するから、縦書きでは漢数字で表記し、横書きの場合は算用数字で表記する事に成る。しかし、「一言」や「八方美人」「十分」のやうに、既に純粹な数量の表現とは言へなく成つて語彙化した物は、漢数字での表記が定着してゐる。この種の語句は数多いが、それらは横書きの場合も漢数字で表記しなければならないのである。

この点での乱れは、既に現在、大人達の文章に屢々見出される。但し、大人達は縦書きの教育しか受けてゐないから、横書きでの乱れも或る程度は仕方がないとも言へる。横書き文書が増えて一番困つてゐるのは、ひよつとしたら世の大人達なのかも知れないのである。しかし、子供達の場合は、絶対にそんな事では済まされない。横書きが既に一般化してゐる以上、今後の子供達には漢数字と算用数字との使ひ分けの能力は不可欠である。その事について、そして漢数字で表記すべき語句の範囲について、従来の国語教育では余り教へられてゐ

ないやうだが、今の内にきちんと教育して置く必要がある。さうしないと、近い将来「1生」「1層」「1緒に」「1種の」「2次的な」「8方美人」「10分に」等といった思ひも寄りぬ表記が、ごく普通に使はれるやうな事に成り兼ねない。横書き指導は、今すぐ実行すべき緊急課題なのである。

4 語彙・言葉遣ひ

語句の不正確な使ひ方が頻出するのも、看護学校生の文章の大きな問題点である。

「最後のしめとしての祝辞」「外の周りがとても良く見えるものだ」「～を一番の感想に持った」「警戒をとって歩いている」「読み始めたうちは」「祝辞ぶったもの」「わかりやすく明朗な文章」「授業で説明をしながら読んでいき」「自分に吸収させてゆきたい」「恨みがましくなってしまうていく」「夫に死なれて、一人きりになってしまった気で落ちつかなかっただろう」

目立つ物だけ挙げて以上通りで、注意深く見て行くと殆ど枚挙に暇がないといった状態である。今に限つた事ではないのだから、それでもやはり、若者達の語彙力の低下はかなり深刻な状態にあると言はざるを得ない。語彙教育の充実が切望される所以である。

だが、より大きな問題は、彼等が自分の言葉に注意を払つてゐない事の方にある。次回の授業でこれらの語句を取上げた所、殆どの者がその間違ひに気が付いたのである。つまり彼等は、知らなかつたから間違へたと言ふより、凡そは知りつつも不注意で、或いは良い加減に使ふ事で、ついついそんな言ひ方をしてしまつたやうなのである。

もう一つ、自分の感想を分析出来ず、抽象的な表現で済ませてしまふ事も、顕著な傾向として指摘して置く必要がある。大半の学生が、主人公の行動や心情に対して、「すばらしい」「すてきだなと思った」「感動した」としか言へず、作品全体に対する感想を「面白かった」と表現するだけなのである。

その傾向が更に進むと、「すごいと思った」「～という感じだ」のやうな、感覚的に感じとして捉へただけの表現に成る。「すばらしい」でも「感動した」でもなく、ただ「すごい」のであり、さういふ「感じ」なのである。この種の例もかなり多いが、さうした傾向の極にあるのが、否定的な感情を殆ど語気だけで表さうとした、「めでたいことばかり言うのもなんだなと思いました」の例であらう。

この種の表現に話し言葉の影響がある事は言ふ迄もないが、それよりも問題なのは、それが語彙力の問題と言ふより、認識乃至は思考の問題だからである。先年若者達の「すごい」の乱用が問題視された事があり、そこで槍玉に上つたのは、専ら「すごい」の意味の変化であり、俗語的語句の使用であつた。しかし、それ以上に問題なのは、どんな事に対しても「すごい」だけで済ませてしまひ、それを分析的に把握しない事にある。

或いはそれは、分析出来ないからこそ「すごい」としか言へない、といふ事なのかも知れない。だがそれはともかく、ここで重要なのは、認識乃至は思考と言葉との関係が、このやうに密接で分ち難いといふ事である。この種の問題は、仄聞する所では既に国語教育でも課題とされてゐるやうだが、かかる実態から見る限り、何等解決されてゐないと言はざるを得

ない。語彙力の不足といふ面もさる事ながら、認識し思考する能力その物の問題として、今一度根本的に考へ直す必要があるのではないだろうか。

不要な語句や不必要な繰返しが多い（これも枚挙に暇がない）のも、その事と関係するやうに思はれる。

私はこの「祝詞」を読んでみて、（4例）

結婚をして子供ができ生まれて、やれやれと思っている時に、

甲斐子と同様に、久夫も結婚披露宴の時の祝詞がこの夫婦をどんなに左右していたか、
わかります。

人の心に残り、その人の心の中で、生きる言葉は、その存在力・影響力はすばらしいと思います。

不要と考へられる、接続語としての「それは」「それに」の使用も、かなり目立つたが（13例）、これも同様であらう。

できることなら、家にいたいです。それは子供を一人ぼっちにはさせたくないからです。それに好きな人の身のまわりの世話をすることは全然嫌なことではないと思います。

どこにでもありそうなできごとがいろいろおきて、とても興味深かった。それに、所々で些細なことだけれど、感じたことがあった。

推敲の問題と直結する事ではあるが、表現すべき事柄に対して語句を精選し、的確に使はうとする態度が養はれてあれば、このやうな事態には成らずに済んだのではないだろうか。作文指導の問題点として、注意する必要がある。

さて、今回の感想文で特に目を惹いたのは、「のこと」「ということ」「というもの（の）」といふ言回しの多さである（14例）。

「兄のことを責めてしまう」「甲斐子のことを応援して」

「結婚ということは、同棲とは違く」「きちんと調べるということをしたい」

「不倫というものはやっていると思う」「その思いというものが打ち砕かれて」

「結婚というのに興味はあります」

この内、「のこと」には、「兄のことを話したら」とは言ふが「兄を話したら」と言へない事からも明らかなやうに、「兄に纏はる各種情報」とも言ふべき意味を表す用法があるが、感想文に見られる例はその種の用法ではない。上記の例は何れも、「兄を」「結婚は」「不倫は」と言つた方が判る物で、敢へて言へば、少し一般化し抽象化して表現するといふやうなニュアンスが感じられなくもない、といつた程度の言回しである。もしかしたら学生達は、「兄のことを」「結婚ということは」「祝詞というものが」と表現する事で、それらを自分と少し距離を置いた物として表現したかつたのかも知れないが、正確さを欠く事は確かである。

5 話言葉（若者語）の使用

今回の感想文で最も驚かされたのは、話し言葉或いは俗語の乱用である。

「家族って何だろう。結婚って何だろう」(5例)「～しているんだな、て思います」

「～すればいいってものではなくて」「なんてこと言う人だろう」(2例)

「～できたんじゃないか」(4例)「結婚もしてるし」(5例)「そうゆうふうに」

のやうな、話し言葉特有の語形がごく自然に用ゐられてゐるかと思ふと、若者の仲間内の会話独特とも言ふべき、次のやうな言回しも頻繁に出現するのである。

「そういう気持ちとかって」(6例)「価値感(観) というか考えが」(4例)「恋愛ていううかが始まった時」「あとさすがは親なんだと思わされた所があった」「かっこよく見えた」(4例)「落ち着いた甲斐子をすごく(すごい)感じた」(7例)「ラストシーンは上手く決まった」「とことん親不孝者だ」「いきなりくる急展開の不幸」「最後のへんの～の話」「うけもよかった」「私も正直、～と思いました」「なんかあったかい気持ちになりました」(6例)「結婚ということは、同棲とは違く」

と言ふよりそれは、全体が専らそのやうな調子で書かれてゐると言ふ方が事実に近い。そのやうな話し言葉の口調を含まない、概ね旧来の書き言葉だけで書かれた文章は、48名中10名程に過ぎないのである。

この事実から見る限り、若者達の大勢は既に、話し言葉に近い、しかも仲間内での言葉遣ひその儘で、文章を書くやうに成りつつあるのかも知れない。彼等には、

というか、夫婦って温かいイメージが大きいから、何となく読んでいて嬉しいというか、温かく感じたり、あと、ハンカチのアイロンのしわのこととかすごくいいなと感じた。

といふやうな、まるで仲間内での会話の如き調子で文章を書くのが普通なのかも知れないのである。

驚くべき事だが、だからと言つて若者全体をさうだと決め付けるのは早計だらう。筆者が普段接してゐる大学生の文章はもつと旧来の書き言葉に近い印象が強いし、看護学校生も公と私を使い分けてゐる可能性がなくはない。感想文を書けと言はれて、何も考へずに普段の調子で書いてしまつただけなのかも知れない。だが、大学生のレポート等でも、話し言葉の混入率は明らかに増加の一途を辿つてゐる。

それが彼等の言語生活によつて齎された事は確かである。だが、それでもやはり、国語教育の責任は覆ひ隠すべくもない。果して、現在の国語教育では、文章の、友達と喋る言葉とは全く違つた性格が、どれだけ確実に教へられてゐるのだらうか。成程、教科書には確かに書き言葉に関する記述はあるが、若者達の現状を見る限り危い限りだと言はざるを得ない。

6 助詞の用法

文法に関する領域では、助詞の使ひ方に間違ひが目立つ。一つは「は」と「が」の混同で、

おめでたい披露宴の席はまたたく間に嫌悪な雰囲気になってしまったのには、(5例)
国語が苦手な私は、この祝辞を読んでまず感じたことは、難しいなあということでした。

等の「は」は「が」とあるべきだし、逆に、

寒い体育館の中で、じっとしたまま長々と話を聞くのが得意ではありません。

今でも覚えているのが中学生の時に聞いた祝辞です。

等の「が」は「は」でないといけない。また、

二人の子供とはこんなにすばらしいと思わなかった。

の例も、正しくは「子供（の存在）が～（ものだ）とは思わなかった」とあるべき所だし、

このお話は、誰にでも起きてはおかしくないことばかりで、

の例の「は」も「も」でなければかしい。

格助詞の間でも間違いが多く、「～に気付く」を「それを気づいた時」と表現してゐたり、「～を知る」を「～ことには、この話の中で初めて知りました」と間違へたりしてゐる。以下、数例だけ挙げて置かう（括弧内が正しい形）。

みんなの前で披露した所が（に）とても好感を持ちました。

その表現が（に）怖さを感じ、また、上手さも感じた

困難を乗り越えてきた人に（だから）こそ言えた言葉だと思います。

中で注意を要するのは、可能動詞に関する誤用である。

祝辞を（が）言えたんだと思います。

アイロンがけを（が）できないことを、

可能表現は「～が～が 出来る」の形で表現されるが、誤つて「～を 出来る」と言つてしまふ事がある。可能動詞と普通の動詞との間に「する—出来る」「言ふ—言へる」のやうな対応関係があり、「する」「言ふ」の方が「～が～を する」「～が～を～に 言ふ」といふ形を取るからで、それに引かれて可能動詞なのに「～が～を 出来る」「～が～を 言へる」と言つてしまふのである。

この種の間違いは成長するに連れ次第に減少する物だが、近年は若者や大人の間にも、それ程多くはないものの確実に現れつつある。

その外、格助詞の間違いには、「気持ちがよく書き表しているなあ」「木原家へ披露宴への出席する時」のやうな不要な助詞の使用や、「打開策だけしか頭が行かず」のやうな必要な助詞の脱落（この例は「だけにしか」が正しい）も見られる。

中で注目されるのは、「に」とあるべき所を「に対して」と表現した例の存在である（8例）。

～妻に対して親切をつくすべきだ、

相手方をほめたりその人に対して喜ばれるような、

この私の考えに対してはあまり自信がないが、

同様に、

結婚について、夢がなくなってしまうと思いました。

の「について」も「に」で十分だし、次の「にとって」は、「は」と改めるべきだらう。

甲斐子と久夫にとって祝辞をどううけとめたのだろうか。

この問題は、「語彙・言葉遣ひ」の項で取上げた「のこと」や「ということ」等の言回し

の多さと、同質の問題のやうに思はれる。普通なら「兄を責める」と言ふ所を「兄のことを責める」と表現する事は、「兄」を距離を置いて表現しようとする姿勢の現れと考へられるが、「妻に親切をつくす」と言へば済むのに敢へて「妻に対して親切をつくす」と表現するのも、「妻」に対する同様の表現姿勢の現れであるやうに思はれるのである。

この種の表現は最近増え始めた物のやうで、確たる説明は出来ないが、近年目立ち始めた助詞の「とか」や所謂半クエスチョン等と軌を一にする物ではないだらうか。「テレビとか観てゐたら」等と少し暈して表現したり、「大学の前のコンビニ=?に行つたら」等と聞き手に承認を求めたりするのは、自己の表現に対する責任を回避しようとする姿勢の現れだと思はれるが、それと同じ事がこの種の表現にも言へるやうに思はれる。即ち、「のこと」「ということ」や「に対して」「について」等も、表現者としての責任を回避しようとする姿勢が、距離を置き少し暈した表現を取らせたのではないか、と思ふのである。もしさうなら、ひよつとしたら日本人は、自分の表現に責任を取らないで済むやうな方向に表現法を変へつつあるのかも知れない。

7 文の組立て

文の組立てで最も目立つたのは、主題部「～は」と説明部の不整合である。

それは、兄のせいで洋品店経営がおもわしくなくなる。

その理由は、～忙しくて疲れている時に無理に私がデートに誘っていた。

私の考えるには、～久夫が～甲斐子が着る。

等が典型的な例で (10例)、

初めて読んでみて思ったことは、～とてもおもしろいなと思いました。(7例)

私の印象は、～などの感じがしてました。(2例)

私が考えた結婚とは、～ことではないかと私なりに考えました。

のやうに、主題部と説明部に重複のある例も少ない (15例)。

叙述(陳述)副詞の呼応に関しても、係り受けの不整合は見出される (5例)。

(祝辞は) 決して気分や期限を損ねるようなことを言うことだと私は思っていました。

ちょっと一緒にいる時間を長くしよう(と)すると書かれているが、

もし甲斐子が自分から姑を引き取った後のことがはっきりと分かるようでした。

きっとこの二人は、仲良くやっつけていけるような気がしました。

「決して」「ちょっと」が打消の表現を導いてゐないし、「もし」や「きっと」も仮定表現や推量表現と呼応してゐないのである。

連体・連用修飾についても、同様の例がある。

いわゆるうばい取ってしまった。

いつもはなんとなくの意味で読んでしまった。

全くとあまり深く考える人は数少ない。

さて、6と7の項で取上げた文法に関はる問題について言へば、そこには次のやうな共通点が見出される。学生達は、誤用を指摘するとどの問題についても十分に理解を示す。その

限りでは単なる不注意と言へなくもないが、彼等は指摘される迄は誤用とは気付かない。つまり彼等は決まりを知らないのではなく、知識が単なる知識に止まり、使用する能力に成ってゐないのである。

ここに、文法教育の重大な欠陥がある。これ迄の文法教育が知識を詰め込むだけに止つてゐるといふ批判は、学校文法の普及以来で既に常識化してゐる感があるが、知識が使用能力に結び付かないといふ根本的な欠陥は、ここにも明らかに現れてゐる。筆者も既に触れた事があるが(注1)、文法教育は今一度さうした根本的な事から考へ直す時期に来てゐるのではないだらうか。

8 文章の構成

文章全体に目を転じると、長文の多さが先づ目に付く。個人差はあるが、半数近くの文章に長文が存在し、数名は長文だらけといった状態である。

長文も、それ自体強ち悪い訳ではない。文筆家の書く物には、長文ならではの独特の味はひを持つ文章もなくはない。しかし、やはり一般的には、長文は避くべきである。普通の者の長文では、構文に乱れが生じ勝ちだからである。我々の書く文章は実用を旨とするのが普通で、さうである以上構文の乱れは命取りである。何を言ひたいのか、判読しづらく成るのである。

学生達の長文はその典型で、必ず構文の乱れを伴つてゐる。次の例は原稿用紙13行にも及ぶ最長の文だが、一体何を言ひたいのかと思ひたく成る程、曖昧模糊とした表現に終始してゐる。

きびきびしたやり方の一部を取り戻したかに思われた甲斐子さんの行動が、赤ん坊のことに関してはきっちりしているが、久夫さんの身のまわりのことについてはルーズになつてしまいそのことについて甲斐子さんは久夫さんに対してすまないという気持ちを持っていることに甲斐子さんのお母さんがそれは、はじめての子を持った若い妻の夫への特別な愛情であるが、それが二人目のときになったら、やりっぱなしでもそれが当たり前と思ふようになるのよという甲斐子さんのお母さんの言葉が、自分の母の言動に重なる部分があつたので印象に残りました。

こんな文でも、どうしても読み取らねば成らない場合は、苦勞に苦勞を重ねて推測する外ないが、もしさうしたとしても、不確かな事しか読み取れない筈である。この文には長文以外の不備も加はつてゐるが、こんな文で意思の伝達が出来るとは到底言ひ難い。

こんな場合、書いた本人がその文の内容を正確に把握してゐないのが普通である。文の乱れは思考の乱れで、本人が自分の書いてゐる事が確り理解出来てゐないからこそ、このやうな取り留めのない文を書いてしまふのである。原因は思考の好い加減さにあるのだが、考へて見れば、普通の人がある長大な内容を一遍に把握出来る筈はない。長大な儘把握しようとするから失敗するので、この事があるからこそ、一文は短く簡潔に、長文は幾つかの文に分けて、といふ長文の戒めがあるのである。

もう一つ、行文に於ける論理展開の曖昧さや乱れも多発してゐる。実例は省略に従ふが、

彼等の話は、どうしてそんな風に展開するのか、どこからそんな結論が出て来るのか、判らない場合が少なくない。ひどい場合には、何を言ひたいのか理解出来ない事すら、なくはない。それは、AからどうしてBといふ結果に成るのか、どうしてCとDだけからEが言へるのか、Fに対するGは前提なのか条件なのか等といった事が、きちんと把握され表現されてゐないからである。

それで十分に予想される事だが、看護学校生の感想文は、文章構成の面でも不備・不統一が顕著である。心に浮んだ事をその順にただずらずらと書き連ねてゐる、といった印象ばかりが強いのである。端的な例が段落意識の希薄さで、段落の立て方自体、1～2行毎に改行する者があるかと思へば、殆ど改行箇所がない者もあるといった有様である。その段落も、別の段落にすべき部分が同じ段落に収められてゐたり、改行する理由のない箇所改行されて別の段落に成つてゐたりする。

段落相互の繋がりも不明確な事が多い。前後の段落に格別な繋がりを見出せない事も多く、中にはどう読み進めれば良いのか、考へ込んでしまふ場合すらある。心に浮んだ順に、凡その繋がりだけを頼りに書き連ねてゐる訳で、文章全体の纏まりも当然希薄になる。文章としての有機的統一性など、殆ど望むべくもないのである。

さう成る原因は、結局の所、彼等の表現姿勢にあるやうに思はれる。彼等は確かに、『祝詞』といふ小説に感動したらしい。それなのに、執筆に際して、さうした感動の因つて来たる所はどんな事で、自分は何故にそれに心を打たれたのかが、追究され分析されてゐない。「面白かった」「感動した」等といふ通り一遍の感想に端的に窺へるやうに、自分の感動を突き詰めて考へない儘書かうとするから、段落も文章構成も曖昧に成つてしまふのである。

しかして、ここでも、文章表現或いは作文についての指導が不足してゐる事は明らかである。既に触れた通り、文や文章の乱れは決してそれだけでは終らない。認識や思考が不十分であり混濁してゐるからこそ、文や文章が曖昧な物に成り、乱れも生じるのである。さう考へると事は重大で、国語教育では、子供達の思考力を確かな物とする為にも、きちんと整つた文章を書く訓練を、もつと真剣に、もつと時間を掛けて、為すべき必要がある。

9 将来に向けて

さて、以上の考察を元に結論的に言へば、看護学校生の文章の実態は寒心すべき状態にある。さうしてそれは、独り看護学校生のみならず、現代の若者全体の問題でもある。彼等だけが特に劣つてゐると考へる理由は、どこにもないからである。更に敢へて言ふなら、それは引いては、いづれ彼等が背負つて立つ事になる将来の日本語の問題だと言へなくもないだらう。

若者の活字離れが喧伝されて久しく、最近では若者言葉や小ギャル語と称される言葉の乱れも屢々取上げられてゐる。さうした諸般の言語状況が、彼等の文章能力に影響してゐる事は確かである。若者達は古典を初めとする文学作品から遠ざかり、大人達は若者の指針たり得なく成つてゐる。時代は抛るべき物を失つたのである。若者達はそんな中で、何を範として文章を書けば良いのだらうか。

次代を担ふ子供達により良い日本語を引継ぐ責任が、世の大人達にあるとすれば、国語教育には、その中核を担つて彼等を教育する責務がある。国語教育は、範たるべき何物を若者達に与へたのだらうか。

文部省から出されてある「学習指導要領」には教科の「目標」が掲げられてあるが、「国語」については小学校・中学校とも、次のやうなほぼ同じ事柄が示されてある。

国語を正確に理解し適切に表現する能力を高めるとともに、思考力や想像力を養い言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する態度を育てる。

(平成元年、中学校学習指導要領)

決してすらりと判る記述ではないが、先づ必要とされるのが「国語を正確に理解し適切に表現する能力」である事は、言ふ迄もないだらう。何はともあれ、社会生活を支障なく営む上で不可欠なのは、読み書きを初めとする表現・理解の能力である。中でも文章能力の習得は、日頃の読書経験に拠る所も決して少なくないけれども、初めて文字を習ふのが小学校である事からも判るやうに、学校教育に負ふ所が大きい。また、文章は伝達の手段としてのみ役立つ物ではない。「思考力」や「想像力」を確実な物として培ふといふ点でも、文章は話し言葉より遥かに勝つてゐる。書いて考へる方が、さうでない場合より遥かに確実に考へ得るのである。

しかし、筆者には、これ迄の国語教育が期待に値する成果を挙げてゐるとは思へない。この稿での検討結果は、若者達が小学校以来受けて来た国語教育の結果と見る事も出来、さうであるとすれば、国語教育の責任は決して小さくないと思ふのである。

何故さういふ結果に成つたのか。筆者等に答へられる筈もないが、その原因の一つが、肝腎な作文教育が蔑ろにされて来た事にある事は確かであらう。これ迄の国語教育では、筆者の知る限り文章読解の單元ばかりが重視されて、自ら考へ、それを的確に表現する為の作文教育は片隅に追ひ遣られてゐる、といふ印象が強い。しかもその読解の授業でも、正確な表現・理解に役立つ言葉の取扱ひ方を教へずに、結果だけを押し付ける主観的・文学的説明が横行してゐる、といった感が否めない(注2)。

何よりも先づ、作文指導の時間をもつと増やす必要がある。文章読解の時間を少し減してでも、表現力や思考力・想像力を育てる為の作文指導にもつと時間を与へるべきである。

さうして、そこで肝要なのは、具体的方法の、秩序立つた指導である。作文指導と言ふとすれば添削だけを事とし勝ちだが、子供達に必要なのは、文章を書く上で守らねばならない約束事はどんな事か、どんな点に注意すれば正確で判り易い文章が書けるやうに成るか、といふやうな具体的な方法である。教師はそれらを、最も基礎的な事項から順に、彼等が習得し易い秩序に基づいて教へなければならない。

さて、それもさる事ながら、国語教育での最も大きな問題点は、指導要領の「目的」に言ふ「国語を尊重する態度を育てる」事に関してである。

看護学校生の感想文には、既に指摘して来たやうな様々な問題点があるが、それは「語彙・言葉遣ひ」「文の組立て」「文章の構成」の項でも触れた通り、自分の言葉に注意を払はう

としない彼等の態度に起因してゐる。驚くべき事に、ごく少数の者しか推敲作業をしてゐなかつたのである。さうしてそれは、看護学校生に「国語を尊重する態度」が培はれてゐないからだと考えられる。だからこそ、彼等は自分の言葉に注意を払はうとしないし、その結果彼等の文章には様々な問題点が生じる事に成るのである。

ここで思ひ起されるのは、昨今の日本に言葉を軽んじる風潮が強い事である。言葉は伝達の為の単なる道具であつて、結果として言ひたい事が大体伝えれば言葉なんかどうでも良い、と言ふのである。或いはそこには、言葉如き、自由に使ひこなせるさ、といふ或る種の傲慢さも潜在してゐるのかも知れない。子供の頃から使ひ慣れてゐる日本語なんだから、書きたいやうに書けばそれで十分ではないか、と知らぬ間に思ひ込んでゐる節が、今の日本人にはあるのではないだらうか。

言葉に対するそのやうな態度が社会全体にあつたとすれば、さうした中で育つた若者達にそれが受け継がれるのは寧ろ当然だと言つて良い。彼等だけに責任を負はせるのは可哀相で、責任はさうさせた世の大人達にこそあるとも言へるのである。

さてそこで、国語教育はどうだらうか。国語の教師には「国語を尊重する態度を育てる」事が責務として求められてゐるが、それは直接には子供達をそのやうに教育する事であり、引いては社会全体をその方向に導く事でもある。しかし、この稿での検討結果を見ても、これ迄の国語教育の実態を窺ひ知る限りでも、その責務が十分に果されてゐるとは思へない。どれだけの国語の教師が、「国語を尊重する態度」を育てる事に留意して授業をしてゐるか、少くとも筆者には甚だ疑問なのである。

事言葉に関する限り、国語の教師の責任は重大である。殊に、大人達の言葉に殆ど信の置けなく成つた今の日本で、自分の使ふ言葉を大切にし、自分達の言葉である「国語を尊重する態度」を育み、それに基づいて正しい言葉を使へるやうに、子供達を教育してやれるのは、国語教師だけだと言つても過言ではないだらう。さうした意味で、国語の教師は根本に立ち戻つて、自らの為すべき事を問ひ直してみる必要があるのではないだらうか。

文 献

- 注1 「学校文法」(『日本語百科大事典』1998年5月、大修館書店、VI・7所収)
「文構造の解析と図示」(『信州大学教育学部紀要』79号、1993年8月)
- 注2 「国語の授業とは一文章読解の授業について一」(『信州大学教育学部紀要』81号、1994年3月)

(1997年11月27日 受理)